
Drowing my story

桜宮 舞花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r o w i n g m y s t o r y

【Nコード】

N 3 4 2 6 Z

【作者名】

桜宮 舞花

【あらすじ】

7 2 8 . 1 1 . 3 M a n y m a n y b o o k s t o r e .

各地の本屋にうずたかく積まれたある一冊の本。

人々は本屋に立ち寄ると、次々にこの本を買っていく。

「D r o w i n g m y s t o r y」。

有名な言葉を表紙に掲げたこの本には、「あの戦争」の歴史が記されている。

あなたもこの歴史書を一緒に読んでみませんか

？

Prologue (前書き)

この前書きって筆者が自由に書いていいんですかね。どうなんでしょうね。

この小説は少なくとも7回の書き直しを経ています。しかし未だに書き直して成功した例がないのですよ。三年半以上書き直してますが。

D r o w i n g V e r . 7、これはこの五月から書き直しの奴ですが十二月の今でも未完です。

というか多分また最初から書き直しになるんじゃないですかね。

お付き合いできるところまでお付き合いください。お願いします。

Prologue

" D r o w i n g m y s t o r y " - T h e R i n
n e o f C o l d 7 2 2 . 3 . 2 5

7 3 3 . 4 . 1 4 E r i c e s s , S a r h a r

そよ風の吹く春の季節。桜の花が舞い散り、満開を迎えている。エリセスの主要都市、サーハル。その中心部から少し離れたところで子供たちの声が響いている。教室には新入生の歓声とクラス替えを済ませた上級生の騒ぎ声は既になく、新しい生活の第一歩を踏み出している。そんな中、ある教室では、若い女の先生が教壇に立っていた。その手には、一冊の本がある。

「委員長さん、号令をお願いします」

「きりーっ、れーい、ちやくせーき」

「はい、ありがとうございます。授業を始めます。新しくスター3になったみなさんには、この" D r o w i n g " を今日から教科書代わりに使います。昨日連絡しているはずですし、机の上に出してください」

「せんせー、忘れましたー」

「ロココさん、また忘れ物ですか。新しい年になったのですし、気を付けてくださいね。隣に見せて貰ってください。」

「あのね、セリヤ君見せてくれる？」

「もうその準備できてるぜ！というか今日の朝にお前が机の上に置

きつぱなしだったから持つてきてやったぜ。お前が忘れ物するのはもう決まっているようなものだからな！」

そんなやりとりに笑い声が教室中に響き渡る。

「はいはい、みなさんしずかに」

先生の一言であつという間に静かになり、視線が元に戻る。

「さて、まず”Drowning”の説明をします。”Drowning”は721年から722年に渡つてあつた前の戦役のことを本にしたものです。何人かの人はお父さんやお母さんに聞いていたり、他の本で知つてたりと思いますが、今から詳しく勉強しますし、まったく知らない人でも大丈夫です」

「せんせー、なんでこんな本選んだの？教科書もあるのにー？」
「それはね……」

春の小風が窓から入る。先生は何かを思い出すように、一瞬目を閉じて。

「ううん、これが終わったら教えてあげる」

「では、目次を開けてください。　。」

この本には、12年前のことが書いてある。

この世界を揺るがした、あの戦争。そのちっぽけなきっかけから最後の結末まで。

すべてが書かれている。

小さな小さな、ある一人の少年と、その仲間たちが起こした戦争。

その歴史を今、紐解いてみようか。

P r o l o g u e (後書き)

ちなみにプロットはもう出来てるんですよね、それはV e r . 1の三年前書き起こしから手は加えながらですが骨格は昔のままです。問題はそこからなんですよ！（書けない！）

時間が欲しいです…

1 すべてののはじまり（前書き）

本編とちゆにゆうです！（いきなり噛んで変換ミス）

自分はパソコンで小説は描けないので大学ノートに書いてその後赤で修正を入れ、パソコン入力時に最終推敲を入れます。

（パソコンで書くに変換するときになんかリズムが崩れるというか…新聞にパソコンを絶対に使わないっていうことを書いてた作家さんいましたね）

どうか稚拙な文章ですが、最後までお付き合いください！

1 すべてのはじまり

721.4.8. Eri c e s s S a r h a r n e a r C
o a s t

さざ波鳴りし、春の陽気に包まれた海岸にて。

「今回こそ負けないんだからね！」

「いや、今回も俺の勝ちだぜ！」

春休み明けの進級試験。エリセス、ラグワー、コセツジ、ティアツシュの四国で採用されている「システム」の階級制度では、毎年6月、10月、2月に行われる筆記試験に合格した者が受けることのできる実技テストが4月、8月、12月に行われ、合格する事が出来れば進級する事が出来る。今回の実技試験の会場は、サーハル近くの砂浜となっていた。というわけで、会場への道に男女二人が「じゃあ、私が勝ったら二番通りのスイーツ屋でプリンセスマジカルスウィーツパフェ（金貨三枚）おごってもらうからいいよね、サンダース！」

「それじゃあ俺は勝ったら1日俺の家でメイドさんとして働いてもらうぜ、カナ！もちろん無給だぜ！」

「うぐぐぐぐ…でも、乗ったわ！パフェおごってもらうもんね！」
砂浜への道を、赤髪の男の子「サンダース」と緑髪の女の子「カナ」が歩いていく。その二人の後姿からは仲つむまじさが感じられるが、ふと言葉を聞くと、そうは思えなくなってしまうのだ。しかし、それは事実ではない。

二人は同じ学校の同じクラス。ちなみにその前も同じクラス。その前の年も、その前も。二人とも同時に「上がったしまうから仕方が無いことではあるが、ここでまいくともはや腐れ縁としか呼べな

いものになっている。ちなみに家も隣だったり、両方の両親は知り合いでかなり家を空けていて物心つくころから二人で一緒に過ごすことなんて昔からよくあることだししかも家の窓から窓へと行き来できたりするのでもう踏んだり蹴ったりである。

そして、いつからだろうか。いつもいつも二人は競い合っていた。何かを賭けて勝負するがいつも勝敗は五分五分。勉強は教科によつてはサンダースの方が強いが、カナの方が比較的強い。スポーツは性差を考慮したとしてもサンダースの方が強い。その他、何においてもどちらかが強ければ、どちらかは他の分野で強く、結局五分五分なのだ。ただし、料理だけはサンダースがまったくできず（なぜかサンマの普通の焼き魚を作ろうとしたら魚のペースト汁／＼小骨入り／＼が出来上がっていたりするぐらい）、その点だけはカナにまかせつきりだ。そしてサンダースが勝てば、カナには自分では絶対にできない料理をやらせたり、そのための買い物に行かせたりする。というか家事全般を押し付ける。逆にカナは高いパフェ（さっきのプリンセスマジカルスウィーツパフェとかがいい例である）やケーキなどをおごらせたり、ある時には一日中全てサンダースのおごりで街中を遊び回ったこともある（もちろんサンダースの財布は振つても何も出て来ないぐらいになったのは言うまでもない）二人にとつては、これはお互いのプライドを賭けた勝負に他ならないのである。そして今日はもう何千回目当たるか分からない、その勝負。当然、負けられない。

二人は早めに更衣室に到着し、準備を始めた。サンダースは上に白い半袖の前面に一般的なふつーのロゴのあるＴシャツに茶色のポケットが沢山ついた七分丈のズボン。カナはヒラヒラの桃色のスカートに黒のスパッツ、薄い橙色のシャツに白のカーディガン。二人は次に武器の最終チェックを行う。サンダースは愛用の銃をホルダーに入れ、弾の呼びを何種類もバックから取りだしてポケットの中に入れる。カナは弓の弦がきちんと張っていることを確認し、矢をま

とめて背中えびらの簾えびらに入れる。

「準備は大丈夫だよな？」

「もちろん。じゃあ、行こうぜ」

サンダースは青い空を見ながらそう答えた。今日の青空は、真夏のように雲ひとつなく　とはいわないが、白くたなびく雲が綺麗に映える空。いいことが起こりそうだ。

「サンダース、どこ向いてるの？」

「ん？時計台だぜ」

「うそだよな、サンダース。時計台は向こうだもの、女の子でも見てたのね？」

ニタリとカナが笑って聞く。

「ち、ちがうわ！」

「いくら海の近くでみんな薄着だからって、そんなにジロジロ見ちゃだめなんだよ？」

「今見てる方向は男子更衣室しかないだろ！女の子なんていない！」

「げっ、サンダースって、そういう人だったのね…」

「ちつがあああああああうっ！！」

「じょーだん、じょーだん。ごめんね？」

切れたサンダースにカナがぺロつと舌を出して謝る。

「で、何見てたの？」

「空が青いなーって思っただけだ。他意は無いぜ」

「ふーん。そんなロマンチストだったかしら？」

「まあ、うん、じゃあ、とりあえず行くか」

「あ、ごまかした。しかたがないなあ…」

二人が砂浜に到着すると、掲示板のようなものにルールが張っている。

< 4・ 5受験者へ >

・試験場には「水の石」と「海の石」が隠されています

・ 4 受験者はそれぞれ1つずつ、 5 受験者は2つずつ石を集めてください

・ 2人1組で行動してください。組み合わせは本部にて登録を受け付けています。

・ 9：00 開始、16：00 終了です。1時間ごとに大砲を鳴らしますので、合図にしてください

「へー、2人1組なんだね」

「難度も上がってるしな、二人でやるとどちらかが危なくなっても一方が助けを求められるからだろうな」

「じゃ、私たち二人でやりますか」

「二人一緒の協力型だったら勝負にはならないな」

サンダースが笑いながら答える。

「他の人を私たちの勝負に巻き込むわけにもいかないしね」

カナも笑って答える。

なみね

波音が砂浜に響く。数十隻の手漕ぎボートが並んでいる中から二人は一つを選んだのだが、

「えいやっ！」

カナがおふざけ半分に先に船に乗ってしまった

「おいおいカナ、先に船に乗ったら砂の上から動かないぜ」

「いーじゃん、サンダースなら押せるはずだよ？」

「無茶言うな、降りろ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶだよ！」

この間に他の船の準備は進んでいた。

「早く降りろって、試験なんだから」

「じゃあとりあえず押してみてよ、私軽いには自信あるもんね」

カナが胸を張ってまさしく「えっへん！」のポーズを取る。

「うそつけ、一昨日風呂場から『体重が っ！』っていう叫び声聞こえてたぜ、ばっちり。」

「うそ　　っ！」

ちなみに、このカナの叫び声と同時に開始の大砲がなって二人は聞こえず、係員の人に言われてスタートしたことを知った二人はあわてて沖にこぎ出したのだった。

とりあえず沖の方に出て二人で交代で漕ぎながら藍色の海の底を探る。すると、早速。

「見つけたぜ！」

サンダースが叫んだ。

「じゃ、私が取ってくるね」

と、カナが弓を置いて矢だけ持って飛び込んでいった。危険な生物が襲ってくるかもしれない危険性があるので、矢を念のため持っていく。弓は水中では使えないが、矢を槍のように使えば倒せはしないものの何も持たないよりましだからだ。

潜って1分後。

「ぶはっ、見つけたよ！」

カナが水面上がってきた。その手には光る石が握られている。特に水中で敵にも見つかることなく、無事なようだ。サンダースが小舟に引っ張り上げる。

「サンダース、海の石だったよ！」

「そうか、じゃ、浅瀬に移動だな」

「じゃ、サンダースが漕いでね？」

「なんでだよ！」

「だってー、わたしー、もぐったしー、つかれたしー」

「見つけたの俺なんだけど！」

サンダースはなんだか理不尽に思いながらも、小舟を瀬に戻していく。基本的に海の石は深い水域、水の石は浅い水域においてあるからだ。

大砲の音が三度鳴り、十二時を示す。

二人は持ってきた弁当（もちろんカナの手作りである）を食べながらも、目だけは海の底を覗いている。

「ねーねー、サンダース」

カナが水面から顔を上げてサンダースの方を見る。

「うん？」

「来る途中で言ってた、プリンセスマジカルスウィーツパフェの話
どうするの？あれ、どうしても食べたいの」

カナが上目遣いでサンダースに接近する。流石に十何年の付き合い
のサンダースでと言えども、

「うーん……」

少し悩む。

「サンダースなら気前よくおごってくれたりするよね」

「しない」

サンダースはあっさりとカナの誘惑を振り切った。

「けちー」

「高すぎ。だって金貨3枚はおごるにしては高すぎだぜ……」

「なら、どれぐらいだったらおごってくれるの？」

「なんで絶対におごる話になってるんだよ！」

サンダースが突っ込む。

「けちー」

「そーだな、じゃあ1日うちでメイドさんとして働いてくれたらお
ごつてやるぜ。そーだな、制服はカフェ・レポスの物でいいぜ」

「いっててもいつもメイドさんのごとく働かせているのは気にしては
いけない。」

「え、あのカフェ・レポスの！？」

「食べたいんだろう？」

サンダースの顔がどんどん悪巧みの顔になって行く。おまけに頭の中も（試験中なのに）桃色に染まる。

「で、でもあそこのメイドというか、ウェイトレスさんのかっこう

って、いうのは…」

カフェ・レポスは先述のプリンセスマジカルスウィーツパフェを出すお店である。そのウェイトレスさんの格好といえば、店長（実はサンダースの知り合い）の趣味満開で、フリフリたくさん、絶対領域完備のスカートに胸を協調するような上着に数々のリボン、一般市民の女の子に言わせれば「人前で着たくないけどめっちゃくちゃかわいい」と評判の制服である。

なんとか悪巧みの顔を元に戻したサンダースが聞く。

「イエース、シェイキングベイビーナウ。」

「意味が分からないよ、サンダース…」

「で、着るか？着ないか？」

「着ないよ！」

「じゃあ、パフェはなしだな」

「わ、わかった！次に水の石を取った方の言う事を聞くのよ！」

「了解。カナ、メイド服の準備はしておくぜ…」

その会話の後、二人の眼は真剣に海の底を探す。

しかしながら、一通り見た後は移動しなければならない。すなわち、

「お前が漕げよ、カナ！」

「サンダースこそ漕ぎなさいよ！」

という不毛な争いが繰り返された。

「キリがない」

そうサンダースが言ったのは、もう一つ大砲がなった後の事。

「ちょっと潜ってくるわ」

「じゃあ私は上から見ておくね。おぼれないようにね」

先ほど、水の石は浅い所にあると言ったが、浅いと言っても2m以上はある。下手をすればおぼれたり、敵に襲われれば危ないことは間違いない。

「あんまり船を動かすと見失うから、動きすぎるなよ」

「早く石は見つけたいけど、サンダースがいなくなったらパフェお

「ごつてもらえないしね」

サンダースの言葉に、カナが笑って返事を返す。

サンダースが潜って、顔を出してを繰り返して十分後。

「ん？」

サンダースは何やら光を藍色の海の中から見つけた。一旦水の上に顔を出し、息を思いつきり刷ってからもう一度潜る。潜る前にカナに伝えようと思ったが、声がすぐ届きそうにはないところだったので後回しにすることにした。

「はれは…？（あれは…？）」

サンダースが見たのは洞窟。その洞窟の中から青白い、海の色とは違う光が漏れていた。

「はひってひるか（入って見るか）。」

サンダースは奥に入って行く。

入ったところにあつたのは、水色のような一面を覆うような物体。形容しがたい、スライムのようなものであつて壁の形を保ちつつも、中身がゆらめいていて、壁みたいなものには十二の円が描かれている。いかにも「なにか怪しげなものですよ」的雰囲気醸し出している。

（あれは歴史で習った古代転送門に似てないか…？）

サンダースは歴史で習った、500年もの昔の古代の門を思い出す。教科書にぼんやり載っていたイメージはあるのだが、正確な効果は覚えていない。サンダースは数秒迷ったが、そのまま泳いで入っていく。

（男はロマンだぜ！）

そんな事を考えながら、古代転送門に突っ込んでいった。

「ビュン！」

数秒後、転送門の前には誰もいない。転送門は、海の洞窟の中でひ

っそりあるだけだった。

そしてそれが、すべての始まりだった。

次にサンダースが見たのは水の中でない、陸の上の洞窟。前も後ろもで覆われていて、上下左右は土や岩の壁で出来ていたところだった。水の気配は一切ない。そして進むべき方向も判らない。さらに、ここがどこかも判らない。サンダースはとりあえずポケットから小型の灯りを出すが、先はあまり見えない。それほど深い闇だった。

「カツ、カツ、カツ…」

サンダースの背後から足音が近づいてくる。

「カツ、カツ、カツ…」

サンダースは後ろを向き、銃を構える。手に汗はべっとりだ。何がやってくるかもわからない。1人で、どこかも判らない場所。そんな緊張と恐怖がサンダースに襲いかかってくる。

「カツ、カツ、カツ」

足音が止まる。それと同時に。

「……………!!」

「ビュン！」という音と共に紫の光線が飛んでくる。ぎりぎりのところで左に避わすが、

「……………!!」

二発目はよけきれず、左の手をかする。

「ぐっ！」

サンダースは模擬戦とか、テストとか、「絶対に死なない」勝負は何度かやったことはある。ただ、相手も判らぬ、そして死ぬかもしれない『実戦』はこれが初めてだ。つまり、経験値がまったく足りない。

三発目が腹をかする。

四発目が右腕に当たる。

五発目がふともも突き抜ける。

不思議なことに相手が出す光線は傷は負う物の血は出ない。その代わりに逃げられない猛烈な痛みが襲うのである。

「ぐはっ……はっ……はぁ……」

足を突き抜けたことで立つこともできず、動くこともできない。手と腕に当たったことで銃すら握れない。何もできない。

（俺は……死ぬのか……）

そう思った時。

「何だ」

相手の男がいきなり口を開く。

「……様、時間で……す、お戻……ださ……」

サンダースの耳には半分ほどしか聞こえなかったが、誰かと喋っているということだけは分かった。

「ああ、ここにどこから入ってきたが分からんが、虫が一匹いる。

始末しておけ」

「承知……た……した」

そういったところで、光線を出した男は姿を消す。

サンダースは立ちあがることもできず、ただ必死に腹をかかえ、声にならない声を上げている。

「だ、れか……」

ようやく声になった声がそれだけだった。

足音が聞こえ出したが、その足音の後、サンダースは両腕を引つ張られたということだけが分かった。意識がもうろうとする中、次の言葉だけが聞き取れた。

「こいつ、どうする？」

「ラグワ一の森にでも放りだしておくか」

「いいな、上手く行けば魔物に襲われてエサになるだろ」

聞こえたのはそこまでだった。見えた物も、暗闇だけだった。

1 すべてののはじまり（後書き）

感想・レビュー等書いていただけると非常にありがたいです！
そして次の話に対するやる気が100倍です！

2 遠く離れた地（前書き）

今はまだノート（手書き）ストックがあるのですが、（WINGの34と次の章の1234）

すぐにでも切れそうですね…。ストック分を早く放出するか、逆に書きだめてから出すか悩みます…。

2 遠く離れた地

721.4.9. Ragwer" Mysterious Forest"

四国のうち、北東に位置する国、「ラグワ」。そこにある「神秘の森」。木々が生い茂がり、小鳥はさえずる。日光が葉々の間から差し込み、地面に綺麗なゆらめきを生み出す。神秘の森と言われる所以は、中心に古神殿を持ち、そこから森が円状に広がっているのが一つ。また、木々はうつそうとした暗い森ではなく、明るすぎず、暗すぎずの丁度いい環境を生み出しているのが一つ。

さらにもう一つは、森なのに魔物はまったくいないことである。一応動物はいることはいるが、人間に友好的だったりおとなしい動物のみで、危険性はない。おまけに、魔法薬となる薬草、香木、木の実などが豊富にある、まさに「神秘の森」である。先に言った通り、危険性が皆無なので、一般市民の小さな子供でもまったく問題は無い。だから、市民の休日のにこいの場になっている。

そんな神秘の森と危険な森と呼ばれている森（こっちはかなり強い魔物が出ているので、5以上の者しか進入禁止）との中間地点付近。そんなところにサンダースは寝ていた。周りの木より一回り…、いや、二回りも大きな大樹によりそう形で。

「……」
サンダースは目を開けようとする。

「……」
視界がぼやけてゆがんで、何がどうなっているのか分からない。

「だ…じよ…ぶ……か？」

サンダースは目を一回閉じて、もう一度開け、目をこすり立ち上がろうとする。

「…だいじょうぶですか？」

そこでやっと女の子に声をかけられていることに気付いた。

「…だいじょうぶですか？倒れてたみたいですけど…？」

「…ああ、大丈夫だ。」

立ち上がり、土を払いながらその女の子に返事をする。とりあえず怪我はない。体の節々が痛むが、歩けないことはなさそうだ。

試験中と言う事を一番に思いだして。

「今何時ぐらいかな？」

「14時ぐらいだと思います？」

（…後2時間か。やばいな…）

試験終了は16時である。

「ここ、どこ分かるか？北に流されたか、南に流されたか…」

「神秘の森の東側なのですが…。」

「『神秘の森』……………？」

（たしか地理で習った…）

サンダースは昔々習った地理の授業を思い出す。

先生「昔俺も言ったことあるんだけどな、ラグワーには”Mysterious Forest”、『神秘の森』というところがあったな、それはそれは綺麗だったんだけどなあ… 今じゃ行けやしねえ」

「……………それは本当か！？」

「そ、そうですね…」

サンダースが語気を荒げたせいか、女の子は少し怖がって後ろに下がってしまう。

「あ、ごめんごめん、怒ってる訳じゃないんだ。話を聞いてもらえ

るか？」

「あ、はい…」

戻ってきてくれる。

「確認するけど、ここラグワー？」

「はい、確かにラグワーの神秘の森ですが、何かあったんですか？」

「いや、あの、その、うん」

エリセスとラグワーは国境と国境でも100km、試験場と『神秘の森』では160km以上離れている。過去の歴史が通行できない理由を示しているのは言うまでも無い。

「いや、だって俺さっきまでエリセスに居たんだぜ？」

「冗談に聞こえるのですが…？」

「いや、本当なんだって」

「アクセサリーはまだエリセスでも使われていますか？」

「ああ、使われてる」

「アクセサリーを見せて頂ければ信用します」

「ほれ、あいよ。」

サンダースはスターアクセサリーをその女の子に投げる。女の子はじつとそれを見て、

「本当にそのようですね…お返しします」

スターアクセサリー。それは身分証明書になっているもので、名前、スター、所属団体（国家、学校…）とその者が持つ武器（魔法）を証明するもので、この世界では開発されてから四国で数百年以上使われているものである。

「とりあえずは信用してくれた？」

「信じれると思います？」

「思わないけど本当」

「ははは…」

「ふふふ…」

二人は思わず笑ってしまった。

「ああ、そういえば」

サンダースが試験を思い出す。

「今はまさかと思うけど、8日か？」

「9日です」

「まじかよ…」

ガツクリとサンダースはうなだれる。試験が寝ている間に終了するなんて聞いた事もない珍事件だ。

「そう落ち込まなくていいと思いますよ？だって何かに襲われても無事だったんですから」

「まあ、そうだけどさ、それでも試験はどうなったのかとか、一緒に受けてたペアの子はどうなったとかさ、気になるだろ？」

「その気持ちはよくわかりますけど…」

そのまま話は続いていく。そしてそろそろ日も大分傾きだした時、女の子が話を変える。

「申し訳ないのですが、私はもうすぐ家に帰らないといけないんですが…。あなたはどうしますか？」

「うーん、行くあてもないしな… しばらくは野宿するのかなさそうだな」

「よければ、うちの家に泊まって行きませんか？」

「え、そんな、いきなり見ず知らずの男泊めて大丈夫なの？」

「ええ、構いませんよ。ちょうど1人分開いてます。」

「わかった、ありがとう……そうだ、名前は？」

「私はユーリ。ユーリ・ハウテラーです。あなたは？」

「サンダース・フライヤー。よろしくだぜ」

「こちらこそよろしく願いしますね、サンダース君」

二人は握手を交わし、森の出口へと向かった。太陽はかなり西に傾き、夕暮れの色を森に映し出していた。

――

721.4.9. Orgashia South Gate

「すげえ……」

サンダースが街に入って、最初の一言。

ラグワ―移転首都”Orgashia”（オーガシア）。山の上にある神殿（この神殿は神秘の森とはまた別のものである）を参拝するためにやって来る客が集まり、そのための一軒宿が次第に大きくなっていった町である。その賑わいは人口が多数分散して町が各地にある他の二国とは違い、一極集中しているために非常に大きい。町の入口の南北に大きな市が立ち、東側は開けた平野で黄金の稲穂なる大穀倉地帯、西側は先述の神殿がある。海は北側10km先の隣町にあり、東側で農作物、南の森林丘陵地帯で山産物（？）も豊富。地理的には最高の位置である。

サンダースとユーリは並んで南の市を歩く。

「魔法火炎硝石、1セットで5銀貨だよー！」

「限定50kg分！小麦粉、1kg30銅貨！」

盛んに物が行き交い、町は賑わっている。が、サンダースはその裏に何かあると踏んだ。

何かがある。でない、こんな無理して作っている笑顔がこんなにもたくさんある訳が無い。

そんな思いを持ちつつ、ユーリに言う。

「よかった、お金はそのままみたいだな」

サンダースはそういつつも試験中に出てきたためお金は持っていないのだが。

「16年前に分かれたばかりですからね。物の値段は違いますか？」

「魔法火炎硝石はもつと高い。5金貨とかするな。魔法を今でも使う人以外誰も使わないし、そもそもあんまり取れないから売ってないぜ。」

「そうなんですか。そういえば、私まだ今日の晩御飯決めてなくて、晩御飯のお買い物してくるけど何にしましょう？」

「え、俺が決めていいの？」

「どうぞ、全然構いませんよ。私のレパトリーも切れてきたところなので、逆にアイデアが欲しいです」

「そうだなあ…ここでしか食べられないものがないな」

「あんこ餅雑煮とかいかがですか？」

「お正月しか食べないって地理で習ったんだけど！」

「でしたら、他に何かありますか？」

「任せる」

サンダースはそう言って手をお手上げの形に。

そしてユーリはある店に走り、

「おばさん、卵4つください！」

「あいよ、12銅貨。」

卵がどうなるかは全く分からない。サンダースにはラグワーの名物料理で卵を使うものはいだせない。

「その卵どうするんだ？」

「この卵は」

「明日の晩御飯に使います」

おもわずサンダースがすべった音がした。

「今日の晩御飯の話じゃなかったつけ！朝ご飯じゃなかったよな！」

「明日の朝市に流石に朝ご飯を買いに行くような時間はありませんよ？」

「わかるけどさ、今買うべきは今日の晩御飯ですよ！」

「冗談ですよ」

ユーリが少し微笑みながら答える。

「では、晩御飯を買いに行きましょうか」

そう言つてユーリは別の店に寄り、鯛を一匹買つていった。

北の市と南の市を結ぶ中心の道から東に二本ほど外れた住宅街。

「ここが私の家よ？」

木の丸太を意識した作りになっていて、三階立て。

各階はらせん階段で繋がつていて一階には共有居住区、二階に二部屋と三階に一部屋、そして三階の半分はガーデンになっている。

「おじゃまします」

サンダースが玄関をくぐるとそこはふっのリビング兼キッチン。

水周りへのドアが二つあつて階段も上に通じている。

「サンダース君、三階の空き部屋を使つてください。掃除はきちんとしてるから大丈夫ですよ」

そう言われて三階まで上がる。ドアを開けると少し暗い部屋だったが十分すぎる。

「荷物置いたら晩御飯のお手伝いして頂けますか？」

下から声が響いてくる。

「居候の身でぐーたらしてる訳にもいかないしな……」

サンダースは重い腰を上げて階段を下に降りて行った。

晩御飯を終え、食器も洗い終わり一息つく二人。二人で薬草茶をすすっている、サンダースが口を開いた。

「ペアってどこに行ってるんだ？それともソロなのか？」

四国のエリセス、ラグワー、ティアシュ、コセツジには風土を活かした特徴がある。

エリセスは豊かな海を元に海運が発達し、それに伴って武器は漁師の道具から発展していった銃や弓などの遠距離系がが。

ティアシュは大河川と石炭や砂鉄などの工業資源から重工業が発達し、武器はダガーなどの特殊型が。

コセツジは広大な台地と草原、それによる農業や放牧が発達し、武器は剣・槍などの近距離系が。

ラグワーは森とそこに眠る大量の魔法資源と人々の先天的魔力から魔法が。

四国が互いに協力しあえるようになって暦が統一され、700年以上。この間、四国は特性を活かして発展してきた。（もちろん、完全にはなく、魔法はラグワーの外でも使っている人もいるし、他の国の武器を使っている人も居る。）

そして、魔法、その大部分は属性を持つのが中心でのラグワーでは、一人では属性耐性を持っているモンスターや敵には簡単に大怪我をしてしまう場合がある。（例えば炎の魔法は水属性のモンスターに効きずらいので、炎の使い手は水生魔物に遭うとすぐ逃げなければならぬ）なので、相反する魔法の使い手同士が手を組んだり、回復魔法を持たない者と回復魔法だけしか持っていない者が手を組むことが恒常化し、制度化されたのが「ペアシステム」である。ペアシステムは男女で使う魔法の傾向が違ふことから特例がない限り男女で組む。をある程度持った時からペアを組み、それ以後は一緒に暮らし、互いに協力しながら一生を過ごす。（実質的な結婚制度である）

もちろん、ソロで活動するものもいるが、一人で行動するのは属性の関係上危険であるし、多重属性（三属性以上を持つ者）や無属性

魔法の使い手はなかなか稀少な先天的能力でしか得られないため、現実的には99%以上がラグワーではペアを組んでいる。

「私には居たんですよ。」

さびしげにうつむいてユーリが言う。

「過去形？」

「あのバカは優男でしてね、どっかに飛び出てしまったんですよ。『僕には救うべき女性が居る!』と言った後です」

「そいつはバカすぎるだろ…、ここにいるだろうに」

サンダースはケロリというが、ユーリは顔を赤くして下を向いてしまった。

「…」

「…」

気まずい沈黙が空気を覆う。

サンダースが状況を打破するために口を開く。

「ペアは組み直して可能なのか？」

「えっ？」

ユーリが顔を上げる。

「ユーリちゃんはソロなんだろ？」

「ユーリで構いませんよ」

「分かった、ユーリ、可能か？」

「前例はあまりないのですが、少なくとも が一致しないといけな
いと思います」

「ユーリは 3？」

「すみません、私前の12月で 4 になってます…」

「まいったな…、まだ 3のしか持ってない…」

サンダースは「もし普通にしていれば今頃カナがメイド姿で料理を作ってくれてるはずだったのになあ…」とため息をついた。もちろんの差ということも知ったということで溜息が大きくなったが。

「学校に行つて校長先生に聞かないと分からないです、とりあえず、明日学校に行つてみないと…」

「わかった、じゃあ明日学校に行こう」

「分かりました」

その時、壁の時計が20時の鐘を打つ。

「そろそろ私お風呂入ってきますので、その後にでも入って下さい。寝るところはあの3階でかいませんか？」

「十分すぎだぜ、ありがとな、ユーリ」

「後、」

ユーリが顔を変える。

「絶対に、お風呂覗かないでくださいね？見つけたら追い出しますよ？」

ユーリは冗談を含んだ笑顔で言ってるつもりだったのだろうが、サンダースには「ノゾイタラクロス」オーラがたつぷりと出ている笑顔にしか見えなかった。思わずサンダースの顔がひきつる。

ユーリがお風呂に入つて五分後。サンダースは正座していた。木の固いリビングの床に。

別にユーリの風呂を覗いたとかそういう訳でもない。ユーリに言われて正座しているわけでもない。

「瞑想瞑想瞑想…！！」

こいつはただのバカのようだった。

その後サンダースもお風呂に入り、（いろんな誘惑には打ち勝った）ユーリは二階の自室、サンダースは三階の空き部屋で布団に入った。

目覚ましをかけていないことに気付かず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3426z/>

Drowing my story

2011年12月15日22時50分発行